査読付き研究ノート

本邦機関投資家によるESGエンゲージメントの効果測定について

竹　田　健　人 CMA
関　　俊　哉

目　　次

1．はじめに
2．エンゲージメントデータ
3．リサーチデザイン
4．分析結果
5．結論と課題

本稿では、筆者所属の機関投資家データを用いて、企業価値や収益性、ESG評価へのエンゲージメントの効果を検証し、複数回対話した企業の企業価値指標や一部のESGスコアが有意に向上すること、特に３回以上対話した企業はその効果が高まることを確認した。本分析はデータ性質上、選択バイアスを完全に排除することはできないものの、エンゲージメントのポジティブな影響と継続的な対話の意義を示唆していよう。なお、本稿は本文と補論で構成されており、詳細を補論で述べている部分については本文中に注が付されている。
[DOI] https://doi.org/10.69388/saj.63.11.115

1．はじめに

持続可能な社会を目指す過程で、機関投資家の役割に対する関心が高まっている。経済外部性の解決には規制や課税といった政府の役割が重要であるが、例えば、地球温暖化問題では、負の外部性が地域を超えるために各国間の協調が困難なことを背景として、投資家に行動することが求められるようになった（新倉ほか[2023]）。そのため、資金運用の委託を受ける代理人である機関投資家に対して、ESG（注1）を考慮した行動を求めることは自然な流れといえる。さかのぼれば、2006

竹田　健人（たけだ　けんと）
三井住友トラスト・アセットマネジメント㈱　リサーチ運用部クオンツリサーチユニット アナリスト。2019年三井住友信託銀行入社。同年三井住友トラスト・アセットマネジメントへ出向。運用企画部、リサーチ運用部、Osmosis Investment Management UK Limitedへの出向を経て、現職。法政大学卒業、首都大学東京大学院社会科学研究科修士課程修了。

関　俊哉（せき　としや）
三井住友トラスト・アセットマネジメント㈱　リサーチ運用部クオンツリサーチユニット アナリスト。2016年一橋大学経済学部卒業。同年三井住友信託銀行入社。2024年三井住友トラスト・アセットマネジメントへ出向し、現職。2023年一橋大学大学院経営管理研究科金融戦略・経営財務プログラム修了。

©日本証券アナリスト協会　2025